
SSニュースレター

発行：日本アッセンブリー
ズ・オブ・ゴッド教団
日曜学校部
第1号
2001年9月

CD作成に向かっています

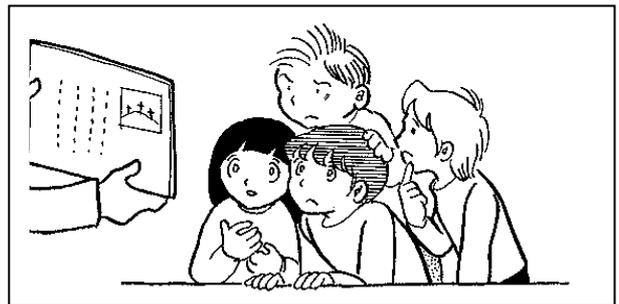
尊き主の御名を心から崇めます。

この度SS部ではSSニュースレターを発行し、教団SS部の活動についてお知らせしようということになりました。今回のニュースレターではSS部の活動の他に、3つの教会のSS活動の取り組みを紹介させて頂くことにしました。

去年は子ども用トラクトを発行しましたが、ご好評いただきましたことを感謝しています。また、「次のトラクトが欲しい」と言われていますことも感謝です。そのトラクトを作成する際にアンケートを採らせていただきましたが、このアンケートを集計しますと、教団の教案を使っている教会よりも「成長」を使っておられる教会の方が多いことがわかりました。アンケートの中でご意見も沢山いただきましたので、SS部では教案について現在検討中です。

今年は翻訳中でした「Your Sunday School at Work」と「Mastering the Methods」の2冊の翻訳が仕上がりました。現在校正中ですが、この2冊の発行をどのようにするかを検討しましたが、製本して発行となりますと多額の費用がかかりますし、在庫管理も大変です。そこで今回は電子化（CD-ROMかフロッピー）して配布しようと考えています。CD-ROMとして発行できるようでしたらSSで使えるイラストも入れ込んでみたいと思っています。なお、イラストは誰もが欲しい物だと思いますので、今後継続して各教会のそうした賜物をお持ちの方から集めさせていただいてCD-ROMのイラスト集を作成したいと考えています。

ただ、SS部の委員のIT技術不足、知識不足でいかにして多くの方に使っていただけるCD-ROMを作ることができるかに苦慮しています（例えば文書をどのようなファイルで作ると良いのか、Macで作成されたイラストをWindowsでも使えるようにするには？など）。是非詳しい方はお教えてください、ご協力をお願いしたいと思います。



ご案内

- * SS部は皆様からの献金によって運営されているところが大きいです。今後ともSS部のためにお祈りと共に献金していただけますようお願いいたします。
- * 教団教案誌（幼稚科、小学下級科、小学上級科、中学科があります）は在庫分を無料にしています。教団SS部に申し込んでいただければお送りします。ただし送料は着払いでお願いします。

中村福音キリスト教会 教会学校の報告

私達の教会は、清流四万十川のほとりの高台に建つ、赤い屋根の教会です。緑豊かな自然に囲まれ、子供達の成長のためにも最高の環境であると言えます。

日曜日朝、8:50 から教師達の祈り会があり、9:00 から CS 合同礼拝、そして6つの分級に分かれて聖書を学びまた全員集合して10時に終わります。

分級、教会学校年間行事は次のとおりです。

分級	担当教師数
幼児科	2人
幼稚科	2人
小学科 1・2年	3人
〃 3・4年	2人
〃 5・6年	2人
ジュニア・シニア女子	2人
ジュニア・シニア男子	2人
大用分校 (月1回)	3人
ミッショネットクラブ	3人

月	行 事
2月	新年お楽しみ会
	終業式
3月	始業式
	春のお祝い会
	四国ユースキャンプ
4月	イースターお祝い会
5月	花の日慰問
8月	父親の会
7月	ファミリーキャンプ
9月	子供特伝
10月	ピクニック野外礼拝
11月	収穫感謝礼拝
12月	大用クリスマス
	クリスマス子ども会
	キャロリング



写真：花の日の病院慰問でミュージックベルを演奏

新年お楽しみ会は子供も教師もおもいっきり楽しく遊びます。終業式、始業式は次のクラスにつながるために学校よりも1ヶ月早く行っています。終業式では皆勤、精勤、努力、特別賞などを送ります。春のお祝い会は子供達の進学、進級を祝って日曜日1日(朝から夜まで)日曜学校、礼拝の後、午後からはゲームしたり夕食を一緒に作り、夕食後には一人一人がこれからの抱負やビジョンを語る時などを持ちます。

花の日は教会磨よりも1ヶ月早く5月に行います。毎年、病院、知的障害者養護施設、消防署、警察署、市役所に花やお菓子、メッセージカードを届けています。恒例となっている訪問ですが、ある病院では30名ほどのお年寄りの患者さんが集まってくれ、私達の賛美や牧師の話を喜んで聞いてくれます。今年はミュージックベルの演奏もしました。長い入院生活のおじいちゃん、おばあちゃんの慰めとなっているのを見て子供達も奉仕する喜びを味わう時となっています。

父親の会というのは、普段教会に来ていないお父さん達に教会に来てもらうための行事です。今年は礼拝後バーベキューパーティーをしました。これは子供達が友達を誘うきっかけにもなったようで、新しい子供達もたくさん導かれて感謝でした。

全国的に教会学校に出席する子供達が減少していると伝えられていますが、私達の教会

学校も同様です。ノンクリスチャンの家庭の子供達は特別行事には来てもなかなか教会学校につながらず、来ている子供達はほとんどクリスチャン子弟です。

そのある子はいじめられっ子を教会に導いて来ました。その子はイエス様の愛にふれ、変えられて、中学生になった今も喜んで速い所から自転車に乗って来ています。家族が寝ていても一人で起き出して励んでいるのを見て教師も慰められ励まされます。

クリスチャン子弟も部活や学校行事で休まなければならないこともあります。そのような時は祈り会や早天に来る子も出ています。7月には中高生4人が受洗するという大きな喜びがあります。

減少に嘆くのではなく、今いる子供達を感謝し、聖書を共に学んでいく楽しい分級の中に神を畏れて歩むという土台をしっかりと築いていけるよう願っています。「若者をその行く道にふさわしく教育せよ。」(箴言 22:6) 信仰を持ってクリスチャンとして歩むその人生は子供達にとって「その行く道」は、きわめて厳しいものです。多くの誘惑と闘い、迫害を乗り越えて進まなければならない彼らに、私達教師はその行く道にふさわしく教育するという重大な責任を委ねられているのです。

子供と共に学ぶ楽しさを体験していく教師であるならば、そのクラスは楽しく、生き生きしてくるのではないのでしょうか。決して私達の労苦が無駄にならないことを忘れないように。「堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分の労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」(I コリント 15:18)

丹澤幹子記

宇部神召キリスト教会 児童伝道の報告

1. これまでの歩み

95年秋、福岡で開催されたメビックセミナーに参加したことをきっかけに、不思議とすんなり、これまでの教会学校の形式を変えることができました。しかし、いくら机とイスを無くして、ゲームやふりつき賛美を取り入れても、まだまだ古い体質を引きずっていました。そんな中、95年、96年と、秋から練習を開始し、クリスマスに上演という形でミュージカルを行いました。学校の前でチラシを配り、団員を募集し、「劇団ハレルヤ」を結成したのです。1年目は、山口放送のテレビ局が取材に来て夜8時からのクリスマス特集番組の中で放映されました。2年目は地元の新聞に写真入りで掲載されました。地域に対するアピール、地元の劇団の協力などの成果が大きかったのは確かです。しかし、このミュージカル上演の犠牲は大きくトラブルもありました。牧師が児童伝道以外の奉仕を怠り、教会員に多大な迷惑をかけてしまいました。結局、劇団活動は休止ということで今日に至っています。ただ、このミュージカルを通して導かれた子供達が、ほとんど教会につながっており、中学生、高校生になっています。リーダー的な子が多いのも、こういう形で集まった事情によると思います。

98年、牧師が結婚し、夫婦で分担を決めて取り組み、児童伝道の本質的なものが変わってきました。キャンプに対する取り組みを強化し、この秋、小中学生合同35名のキャンプを行うことができました。また、この前年から、メビック山口ブロックセミナーは当教会を会場に毎年開かれ、札



幌の内越牧師夫妻、毛利牧師夫妻やスタッフの方々が御奉仕くださいました。昨年、第4回のセミナーの後、この教会のメビックを見学して頂いた際、厳しいお叱りを受けました。まだまだ、中途半端であることを思い知らされ、一週一週がチャレンジの連続です。

2. 具体的な取り組み

試行錯誤という言葉がありますが、この教会の児童伝道への取り組みはまさにそれです。失敗は数知れず、結果的に無駄にお金と労力を使ってしまったこともあります。新しい魂を獲得するために各種イベントを行ってきました。アイスクリームパーティ、ポップコーン食べ放題、抽選会、たこ焼きなど、とにかく牧師達で意見を出し合い、経費は教師、教会員に献金を呼びかけてまかさないました。すでに教会につながっている子には訪問などの他に、教会に宿泊させています。1泊2日で一緒に食事をし、交わりをします。聖書のメッセージ、寝る前のお祈り、そして男女別に一緒に寝ます。1グループ3～5名ぐらいが理想的です。この活動は、ほとんど牧師夫妻だけで行っています。将来的に、専門のスタッフが必要になってくると考えています。公園伝道も1年ほど続けましたが、諸事情により休止しています。まず、本校である教会のメビックを建て直して、分校（公園）に再度取り組むつもりです。

3. 弟子化

99年から、少人数の弟子化ということで6年生男女各3名、計6名を選び、リーダー研修を行いました。1泊2日の聖研と祈りの交わりの会を数回行い、3月には九州への卒業旅行を計画しました。6年生の1年間で、中学校に入学後の、「部活か教会か」という選択へのチャレンジを与え続けました。結果、4名は日曜日に教会に来ています。残りの2名も土曜日の部活の後に教会に来続けています。今年、中2になったこの6名に、再びリーダー研修を始めました。この他に、中学生野球部男子のグループがいます。彼らは日曜日に来ることは殆どできないのですが、練習が休みの日や金曜日の夜などに泊まり、聖研をし、交わりをします。夏休みにも、別企画で彼らの為のキャンプをする予定です。今後は、小学生の中から、次の世代の弟子化への取り組みが必要となっていきます。

4. 児童伝道の奉仕者

児童伝道をする上で、どんなに勉強をしても、祈っても、それだけではどうしようもないことがあります。体力です。私たちはこの問題に悩まされ続けてきました。何度も限界を感じ、倒れそうになりました。メビック方式の教会学校、独自に行っている泊まり会、とにかく体力がないと続けることができません。運動したり、食事に気をつけたり、児童伝道のためには自己管理をしていかなければなりません。それから、若い世代の教師を育てていくことが、これからの課題です。中学生は今、イベントの準備や奉仕を手伝っています。体力も、若い感性という点でも、とてもかかいません。彼らの今後に期待しています。

5. これからのビジョン

児童伝道から導かれた子たちが、献身者となることが私たちの願いです。献身といっても様々な形があり、社会生活の中で主に仕えていく者、牧師、伝道者となる者、様々です。具体的には彼らの中から、海外宣教師が起こされることを祈っています。今回、高1になる子たちを連れてオーストラリアの教会に行くことができました。日本の中だけに目を向けるのではなく、広い視野で物事を見て、与えられるのが当然の環境から、与える者として、貧しい国々、宣教師が不足している国々へ遣わされて欲しいのです。

次の榎原キリスト教会の報告はSSと直接関係がありませんが、現代大変問題になっています子どもの不登校のことを取り組んでおられる報告です。

「不登校の子を持つ親の会」

榎原キリスト教会 小泉 智恵子

「水を携えて、かわいた者を迎え、
パンをもって、逃げのがれた者を迎えよ。
彼らはつぎを避け、抜いたつぎを避け、
張った弓を避け、また激しい戦いを避けて、
逃げてきたからである。」

イザヤ21：14～15

「こんな私は嫌い？本当は嫌いでしょう。」と何度も何度もこのようなことばを投げ続ける子どもと、それを受け続けねばならない母親の苦悩と痛みが「親の会」を通して、ほんの少しだけですが、知ることができたことを主に感謝しています。

私たちの周りで「学校に行きづらい」、「行きたくない」、「行きたいのに行けない」という子どもたちが全国的に増加の一途をたどり、12万人とも15万人とも言われ、表面に現れた数字だけでも、年々増え続けていることを知るとき、地の塩、世の光としての教会に今何ができるのか、これは私個人としての長い間の祈りの課題でした。

* 榎原教会に起こった不登校児の問題と対処

教会の外の出来事だと思っていた問題は、やがて、身近なしかもクリスチャンホームの中にも起こってきました。子どもさんの苦しみ、両親の特に母親の痛みをじかに見聞きすることになりました。

それは、榎原教会の開拓初期の頃でした。母親と共に、切に祈る日々でした。やがて、主は祈りに応えて下さり、学校に復帰することができ、高校から専門学校へ、さらに一流の企業に就職も決定し、社会人となり、現在では結婚して2児の親として、その責任を果たせるまでになりました。すばらしい助け主、主の御名をほめたたえます。

けれども、不登校の問題はそれで一段落ついたわけではありませんでした。まもなく、小学校の5年生の時から、教会に通い、礼拝を休んだことのない中学生の母親から、電話が掛かってきたのです。内容は、「家の子どもが長いこと学校に行きたくないと休んでいます。教会には楽しいのか休まずに出かけていますが、先生、どうしたらよいのでしょうか。母親が学校まで送って行っても、また、すぐに家に帰ってきてしまったり、朝はいくら起こしても起きないのです。」と言うことでした。しかし、子どもは日曜日になると、誰よりも早く起きて、さっさと支度をして、教会に出掛けて行く。電話の向こうでは、教会では何を家の娘に教えているのでしょうか、もっと真面目に学校に行ったり、家での生活がきちんと出来るように教えて下さい、と言いたげでした。

私は、母親からの電話に、大変なショックを受けました。「この子が、学校に行っていない」「不登校を続けている」とても、信じられないことでした。彼女はバスと電車を乗り継いで、1時間もかけて、教会まで通って来るのです。生活態度は真面目で、信仰も熱心、よく聖書を読み、よく祈る姉妹です。品行方正、学校の成績も良く、健康的にも恵まれています。中学生でありながら、誰の目にも、とてもすばらしい、クリスチャンに見えました。

しかし、未信者の両親であるために、何とかしなければとの思いにかられました。まもなく、学校に行かないのであれば、教会にも行ってはならない、との禁止令が出されることになりました。すぐに、牧師と二人で、お宅まで出掛け、ご両親と合って話し合いの時を持つことができました。(しかし、都合により、母親とだけお会いすることとなりました。) ゆっくりと母親のお話を聞いたあとで、私達は、母親に対して、次のことをお願いしました。

- 1 本人が登校したいと望むまで、ゆっくりと休ませて上げて欲しい。(登校強制をしないで欲しい。)
- 2 教会に行くことを許して欲しい。本人の自覚にまかせて欲しい。

教会としての約束

- 1 中学の勉強が遅れないように、教会で教える。(特に、数学、国語、英語)
- 2 教会には、理数系と文系の学生がいるので、授業に遅れが出ないように約束する。
- 3 「教会では、娘さんを信頼しています。必ず、遅れはとりもどしますし、大学にも必ず行けるようになりますから、安心して下さい」のメッセージ。

とにかく、教会に行くことの禁止令を解いていただくと共に、ご両親を安心させるための主からの知恵でした。

それから、教会に行くことが許されました。依然として、学校に通える状態ではありませんでした。教会に来る時には、聖書と聖歌とともに、英、数、国の教科書は持ってこさせましたが、実際には、教会では、あまり勉強を教えたりはしませんでした。

教会では、リラックスさせ、楽しませ、ホットした時間を沢山与えて、夕方の6時頃まで他の兄弟姉妹と賛美したり、奉仕したりして、一番彼女にとって、楽しい時を過ごさせました。そして、家まで兄弟姉妹が一緒に出掛けて、送り届けたり、時には、牧師夫妻がご両親のもとに送り届けました。彼女にとって、本当に自立して行くためのエネルギーの補給基地となったのです。

やがて、数ヶ月経ちました。彼女自ら、中学校に戻り、それまでの授業の遅れも完全に取り戻し、塾に通うこともなく、地域で一番の進学校に合格、更に、現役で公立の大学に入り、ご両親を喜ばせました。

その後も、不登校児の問題は続きます。先の兄弟の弟妹たちも、同じように、不登校を経験して行きます。しかし、母親と共に、主を信じ、子どもたちを信じて、主に委ねつつ、歩んできました。主は、祈りに応えて、一人ずつ、違った方法で、解決を与え、道が開かれ、勝利された姿を見て参りました。

このように、樞原教会でも、「不登校」の問題は、身近なものでした。そして、いつも祈りの焦点は、子どもでした。教会の関わる子どもたちは、その苦悩を乗り越え、各々の道を進んでいます。しかし、「不登校」の問題は、教会の中だけの問題ではないこと、また、子どもたちだけの痛みではないことを知ったのは、他教会の不登校の子をかかえている姉妹を通してでした。

* 「不登校の子を持つ親の会」の発足

昨年の4月のことでした。今まで、使用させていただいた教会が事情で、使用できなくなったので、樞原教会を「親の会」の会場として、使用させていただけないか、との申し入れがありました。

どうぞ、ご使用下さい、と言うことで、樞原教会を会場として、「親の会」が開かれるようになりました。現在まで、「親の会」のメンバーは、12～3名の集まりです。

とにかく、「不登校」について考えたり、議論がなされる時、私たちは、ついつい、何で「不登校」となるのか、子どものせいであるのか、あるいは、親か、先生か、学校が、友人関

係かと、原因捜しに興じてしまいがちですが、原因捜しからは何も見えて来ない、とその道の専門家はこのように語っています。

「不登校」の原因さがしだけをして、不登校の真の姿を見落としていないだろうかと問うているのです。（「不登校児が問いかけるもの」須永和宏著 慶応通信刊）

家庭が悪い、親の育て方が悪い、過保護、過干渉、夫婦中、一人っ子、母子家庭、あるいは、本人が悪い、精神や心の病、学校や教師、クラスメートと様々上げられても、原因追求からは、解決の道は探れないのである、と言っています。

実際に、私達の教会でも、まず、こどもたちが疲れ果て、悩みと痛みの中にあり、親たちも同様に、悩み苦しみ、焦り、特に、母親は、自分の育てかたが悪かったのか、と罪悪感に陥り、自責の念にかられ、自己嫌悪や劣等感、自信喪失に陥ってしまうのです。

不登校は、こどもだけでなく、こども以上に悩み苦しんでいるのは、親たちなのです。特に母親にむけられる世間の目は冷たいものです。他人だけではなく、身内の者から、あるいは、知人や親しい友人からも、無責任な非難や陰口をたたかれ、それらの不理解からじっと耐え続けているのです。私たちは、それらの親たち、特に、母親の心に注意を向けたいと思うのです。

* 「親の会」でしていること

樫原教会の「親の会」では、私は何もしていないのです。していることは、

●お茶の用意（コーヒー、紅茶、緑茶 など）

そこに、手作りのケーキ、ババロア、パンなどをもって迎えます。

まさに、水とパンをもって迎えます。

●母親たちの、苦しみや喜びの体験にじっと耳を傾けます。ひたすら聞き続けます。

絶対に、聖書の教えとか、自分の思い、考えを語りません。

教えたり、指示したりもしません。

●一緒に笑い、一緒に泣く。（親たちより、先に本当に泣けてしまいます。）

* 注意したり、心掛けていることは、

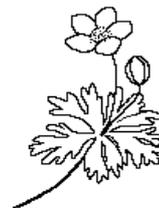
●警戒させないように配慮します

開きかけた心を閉ざさせないように。

あえて、教会色を出さない。

さんび、祈り、みことばの時もない。

これでいいのかな、祈ることができたら、と思う時もありますが、あえて、今は、何もしていません。水の中にパンを投げるところか、大海の中に小さなパンくずを投げるようなことであるかも知れませんが、そのようにしています。



* 親の苦しみ

●登下校の子どもたちの姿を見ると、特に、新学期は、子どもたちは、もっとつらい時であると思います。

●毎日聞こえる、学校の始業、下校時のチャイムの音を聞くと、悲しくなると言います。

（学校の近所にお住まいの方）

●世間の目・・・すべての母親の共通している思い

周囲からの非難、特に身内からの言葉は苦痛、教師のこころないことば、等。

* 悲しいこと

●休んでいいよ、と言っておきながら、実は、目と心は学校に行つて欲しいと訴えてい

る自分

- その心の動きを察知することの目と心
- 子どもが、「こんな自分は嫌いでしょう」と、子どもが母親に問いながら、彼自身が、自分を一番嫌悪している姿を見る時

*** 不安**

- このまま行くと、この子の将来はどうなるのか？
- この子と同じように、弟妹がまた、不登校となったらどうしよう

*** 安定期とは、(彼女たちはそのように言う)**

- 「登校しなくたって、大学に行かなくても、彼らにも生きる道がある。多くの選択肢がある。その子どもに合った素敵な生き方だってある」と理解していける時。(不登校、アッハハと開き直すことこそ、子どもにとって、立ち直りへの一番近道ではないか)
- 母親たち各自が、思い思いを語り、伝えられて、会が閉じられます。

このように、毎月一度、最後の週の金曜日、午後1時から3時間、続けられています。解散後、母親の名を挙げ、その子どもたち一人一人の名が記された祈りのノートを開いて祈ります。

最後に、毎月出される「不登校の子を持つ親の会」の呼びかけは、このような案内で招かれています。

「汗ばむ季節になりました。皆様いかがお過ごしですか。真新しい制服やカバンの子どもたちを見るとどうか学校生活が楽しいものでありますようにと祈らざるを得ません。

でも、楽しく感じられない、息苦しく感じる子どもたちもいっぱいいます。学校に行きづらい、行きたくない、と言った時、私たち親は何をすべきで、何をしてはいけないのか。してはいけないことを必死でしたり、すべきことをためらって、結局何もしなかったり、何だか、反対のことばかりしている気がします。

私たち、母親に出来ることって、ひよっとしたら、おいしい料理を作ることだけかも知れません。さあ、今晚のメニューは何にしましょうか？

私には、この案内は、教会がなすべきこと、してはいけないこと、と読みとれました。

教会に不登校の子も来ている、あるいは、これから来られるとしたら・・・何をすべきか、何をしてはいけないのか・・・

暗唱聖句は？先週のお話は？と言う前に、ゆっくり休んで、おいしいケーキとジュースが用意されているよ。良い子でなくていいよ。と言ってあげたいです。

教会が、疲れ切っている子どもたちの休息の場、明日に向かう子どもたちのエネルギー補給の中継基地、として、利用されるようになったら、と願わせられています。

親も子どもたちも、現代生活に疲れ切っている。真の休息は、キリストの下にしかないのですから。

報告を送って下さった教会に心からお礼を申し上げます。今後さらに多くの情報を提供していきたいと思っておりますので、各教会からの報告やアイデアをSS部にお送り下さると幸いです。

日本の子どもたちの救いを祈り、各教会のSSの働きのために祈ります。

教育局長：高口喜美男 SS部：藤井敬朗 ダビデ・ハイムス 綾部裕子 和田佳士